

思　う　こ　と

今年も若い友だちから年賀状をたくさんもらった。それらのなかに、今年こそ自分を大事にしていきたい——という意味のことばを添えたものが何通かあった。これまでだって、このような決心をもらした年賀状が全然なかったわけでもあるまいが、記憶にのこっていないところをみると、それを受けとるこちらの心境が、そのことばに特別の意味を見いだすまでに至っていないからだったのかも知れない。その気持でいれば、ただの一行のことばからでも、真理の糸口を引き出すことができるであろうから。

と　それはともあれ、自分を大事にするということに気づいたのは、たいへん頼もしいことに思われる。外界に明確な基準を見いだそうと模索しながら、ついにそれを見いだしえなかった者が、翻って自己の内部に生の拠り所を求めるようになったとすれば、戦後ながく若者の心のなかを占めていた空洞のようなものの片隅に、すでに一つの灯が点ぜられたことを意味するからである。

あるいは、それはやがて「自信」とでも名づけられるものへ生長してゆくはずのものかも知れない。

すべてはこれからだ、という気がする。自己の内部に、たといそれはほのかなものであろうとも、生の基準をとらえた個人と個人とが、その基準を育て養いつつ、たがいに他を敬愛し寛容する態度から、新たな人間関係が生まれるとすれば、そういう人間関係にこそ、わたしは精一杯の希望を託したいと思う。

(昭和三十四年一月)